平成二十七年神田古本まつり

土屋　博

文語日誌（平成二十七年十一月三十日）

十月二十五日の日曜日、第五十六回東京名物神田古本まつりに足を運ぶ。本との出會ひを希求する人々の眞劍なる眼差しに改めて觸るるを得。當日の收穫品は以下の通り。

（一）「諸大家名作集　明治の英傑」

四百圓。講談倶樂部新年號（昭和三年）の附錄なれど、四八六頁箱入りの立派なる單行本なり。はしがきの冒頭には、『大人格者出でよ。偉人出でよ。今の日本の狀態を眞劍に見てゐる人ならば、然う思はずにはゐられないであらう。なぜならばさまざまの意味に於て、人心の腐敗墮落が國家の將來を危ふくしかけてゐるからである。』とあり、當時の時代の空氣感ぜしむ。

佐藤紅綠は伊藤博文を、武者小路實篤は勝海舟を、笹川臨風は西鄕隆盛をなど執筆陣は豪華絢爛にして、しかも總ルビ附きなれば、子供も讀むを得。總ルビの傳統、絶やすことなく復活すべし。

（二）「日本外史論文詳解」

二百圓。坂口利夫著、大同館、昭和十年刊。

はしがきに曰く、『苟も國史を愛し漢文に味ひを發見する人なら、日本外史を繙かぬ者は絶無と言つてよい。…私は何時日本外史を讀んでも、山陽の最も意を注いだのは十九篇の論文であると思ふ。故に各傳を讀まないで、この史論だけ讀んでも外史の本旨には十分觸れ得られる事を疑はない。のみならず、この論文を十分讀解出來れば、外史中の如何なる箇所と雖も解釋するのに困難でない事を斷言する』と。日本外史を讀む際に恰好の助言なり。

（三）「日本外史新釋」全十二册揃

原書房のワゴンにて僅か千圓の掘出物。久保天髓釋義、博文館藏版、明治四十年發行、明治四十二年九版。久保天髓先生は、臺北帝大教授を務めたる人物にて、「近世儒學史」をはじめ幾多の著作ある漢學の大家なれば、先生の著作は出來る限り蒐集せんと努む、なかなか止らず。

（四）「日本外史論文講義」

二百圓。池田蘆洲講述。曰く、「余は曩に外史を講ずるに際し、賴翁の一種新創の史體なりと謂ひしが此頃諸生の爲めに春秋を講ずるに臨み、外史の粉本は春秋なることを覺れり」と。

（五）「日本政記論文講義」

二百圓。膽山生駒章講述。曰く、「此書は、我邦上古以來政體の沿革を記せしものにして山陽賴翁が最も晩年に著す所なり」と。日本政記は、伊藤博文らが渡英の際に持參し、熟讀したることにて有名なり。

（六）「現代語から古語を引く辭典」
千圓。三省堂、二〇〇七年刊。文語の苑同輩のN氏のかねてより推奬の書、文語作文には必攜の辭書なり。たとへば、犬の鳴き聲「わんわん」の古語は「べうべう」（びようびようとも）の由。

（七）「明治百人一首」
古書會館にて千五百圓也。末吉勘四郎編、大正四年刊。和綴。賜天覽とあり。明治の代表的人物を網羅し壯觀とこそいふべけれ。

（八）少年傳記叢書「號外吉田松陰文」
八百圓。民友社、明治二十九年刊。定價金拾五錢也。略傳、漫遊、韜晦、論策、交友、村塾、家庭、最後、雜編より成る。

古本まつりの最終日（十一月一日）に再訪するに、展示物に若干の荷動きあり。更に數册を購入す。

（九）「日本思想の系譜」上下
千八百圓。小田村寅二郎篇。時事通信社刊。上下卷總計千八百ページに及ぶ浩瀚なる書籍、函入り。以前にご紹介したる國民文化研究會版の名著五册本の改訂增補決定版なれば、一家に一揃ひ常備すること望まし。

（十一）「和漢吟詠集」二册
四千八百圓。陸軍教授友田宜剛著。三成社、昭和七年刊。「からくれなゐの卷」は漢詩を、「やまとにしきの卷」は和歌を集め、精神作興思想善導を狙ひとす。內容の濃さは類書を遙かに凌ぐ。

（十二）「偉人と書柬」
三澤精英著、隆文館、明治四十四年刊。日本史上の百十七名の書翰を收錄し、解說を施す。文語、候文の勉強に相應しと覺ゆ。

（平成二十七年十二月十六日受附）